

環境問題などの解決の有力な手掛りになり得る素地を十分に有していると考えられるが、その進展については、それを取りまく諸般の条件整備に影響されるといっても過言ではな

いと考える。

今後、バイオテクノロジーの進展に期待するとともに、それがもつ意味を広い視野に立って充分認識していくことが大切であろう。

ブラジル便り

国際協力事業団委嘱
ブラジル野菜研究プロジェクト専門家
(前農水省婦恋馬鈴しょ原原種農場長)
秋元喜弘

1987年11月11日13:30頃(現地時間)無事ブラジリアに到着、市内のサンマルコホテルに落付きました。大使館JICA事務所野菜試験場へのあいさつを済ませ、先月から試験場の方へ出勤しています。

試験場は市内から40km程度離れた原野に数年前に建てられたもので場所所属のバスの送迎をうけています。まだ来たばかりでよくわかりませんが面積は1,000ヘクタール以上、職員総数200名以上、うち研究員は40名ぐらいで常時数名が学位をとるために主としてアメリカの大学に留学しています。

実験室温室などの規模は日本の試験場に比べると劣りはしますがかなり整備されています。建物はできていますが実験器具類はまだ決して十分とは申せずその面からもこのたびのプロジェクトによる機材供与に大きな期待がかかっているものと思われまふ。野菜のなかで重要なものは馬鈴薯、トマト、タマネギ、ニンジン、ニンニクなどでこれらはいま市場で多量に出廻っていますが品質は決して上等とは申せず日本で屑のようなものが立派な商品として扱われています。

馬鈴薯を含めて野菜の主産地はサンパウロ周辺ですが最近ブラジリア周辺でもかなり大規模に行われるようになったとのことでした。馬鈴薯は地域によりウィルス病の発生が少なくなり、よい種いもを使う重要性は他国と変りませんが、いまのところ外国からの種いも輸入に大きく依存しており大きな債務をかかえている現在、少しでも自給をはかることが課題です。

この試験場の中に無病原原種を生産する部門があり、どの程度の規模と内容をもっているかはわかりませんが、その担当責任者である井上和子アリセ嬢(日系)はこのたび日本大使館で行われた

留学生試験に合格し修士課程でジャガイモのウィルス病について勉強したいとの希望をもっています。

ウィルス病担当の研究員はおりますが、ジャガイモのウィルス病について勉強した人はおらず彼女が日本での留学を終えて帰国すれば、この国でのその道の権威になるものと大きな期待がもたれています。

ブラジリアは原野の中に人工的に計画されてつくられた町で、川をせきとめてできたパラノア湖のほとりにあたかも飛行機のような形につくられており胴体の頭の部分に国会政府機関大統領官邸などがありそれにつづいてホテルその他銀行大会社などが集中するセントロと称するところがあり翼の部分は主として6階建のアパートが区劃されて並んでいます。各区劃ごとに商店学校などそれに緑地帯があります。

発展途上国とはいえ、首都ブラジリアを見るかぎり先進国に近い感じをうけますが、一步郊外に出ますと貧民の家などが密集しており、やはりここは途上国なのか、との感を深くしました。年間をともし30度を越すことはなくまた最低気温も12～13度ぐらいとのことでした。

世界に名だたる超債務国ですが、物資は街にあふれ、特別なものの以外は何でもあり、日用品衣料雑貨なども品質はともかく量は豊富でしかも日本と比べて安く、とくに食料品は日本の何分の一という安さです。たとえば米の上等品が5kgで400円、塩は1kgで30—40円、バナナ20円、パイナップル1個30—40円といったところですよ。日本とくらべて絶対的に高いのは「水」で水道水は赤土の粒子を含んでいるため飲用できず、市販のビン入りミネラルウォーターを飲みますが、これが1.5ℓ入りで40—80円ぐらいで日本の水の良さを今更ながらに感じました。洗たくも水が悪いため白いシャツなど少しづつ赤茶色に変色してゆきます。

しかしともかくも、町はきれいで気候もよく、物資も豊かであるため途上国で生活するにはもったも恵まれた環境といえます。それでは、またの機会に。